**週刊やすいゆたか117号14年１月２日**

**時熟し実りの幸の多(さわ)なるを卓に盛らるる日を焦がれつつ
物と成り行ひてこそビジネスの日はまた昇る扶桑の里に
日月と嵐の神の貴(うづ)なるは天降りして国建てしゆえ**
　時が熟し、次々とはじけるものがあり、著作に追われていますが、出版はなかなか難しくてウェブマガジン『プロメテウス』に書き貯めています。『ビジネスマンのための西田哲学入門』を書き上げ、現在『幻の「倭人三国伝承」ー三貴神の天降り仮説』に取り組んでいます。

<http://www46.atpages.jp/mzprometheus/>

二〇一四年　元旦
　　　　　　　　　　**保井　温（やすいゆたか）**　 **二〇一四年年頭メッセージ**

　以上が今年の年賀状です。終戦直後に生まれまして、既に68年の人生を刻んでしまいました。まことに下手くそな生き方で恥多き人生です。まさか 21世紀になって、こんな不甲斐ないことになっているとは、私の不徳のいたす所でして、誠に申し訳ない限りです。世の中もそうですし、自分の境涯も情けない状態です。全く空回りの連続というところでしょうか。そろそろ人生を諦めて悟ってしまってはどうかという声がどこかからするようですが、不思議なもので、最近時が熟したのか、次々と自分の中で弾けるものがあり、それを書き留めなければと著作に追われています。
　『ビジネスマンのための西田哲学入門』は、ビジネスに西田哲学が活かせるということを示したものですが、それは三木清や戸坂潤などが最後まで感じていた、西田哲学は観照的で非実践的なものではないか、歴史性社会性に欠けているという表層的な疑問や批判に応えうる内容になっていると自負しています。やっと恩師梯明秀先生の気持に近づけたのかもしれません。本書はなんとか出版に漕ぎ着けたいのですが、悪戦しています。
　今、執筆中なのは『幻の「倭人三国伝」ー三貴神の天降り仮説ー歴史知のチャレンジ』です。以下概略です。
　**これは梅原古代史の研究から出てきた疑問を膨らましたものでして、『古事記』『日本書紀』のもとになった口誦の倭人三国の伝承を幻視しようという試みです。
　つまり記紀は権力者の都合でかなり元の伝承を作り替えているのではないかと言われていますが、何しろ元の『天皇記』『国記』は乙巳の変で焼けてしまったと言われます。その『天皇記』『国記』が書かれた際に、それまでの倭人三国の口誦伝承が作り変えられているわけですが、どこがどう変えられたのかは記紀の矛盾点を丹念に見直すことである程度想像がつくということです。
　その際に記紀に対する疑問があります。主神は天之御中主神から天照大御神に差し替えられたのではないかということ、天照大御神が女神だとされたのは七世紀からではないのか、何故天照大御神は女神にされたのかということです。それから邪馬台国の女王卑弥呼は記紀の誰に当たるのか、誰にも当たらないとしたら、どうして記紀に伝承されなかったのかという疑問です。
　そして最大の問題意識としては、記紀は統一王朝である畿内の大和政権の歴史伝承であるけれど、元々の伝承は、統一前の伝承があったのではないか、それは畿内倭国、筑紫倭国、出雲倭国などの謂れやその盛衰、興亡を語り継いだ「倭人三国伝」ではないかということです。
　その発想は『古事記』の「三貴神の誕生」の講読から気づいたのです。もしアマテラスが主神ということなら、三貴神という横並びはおかしいではないかということですね。何故アマテラス、ツクヨミ、スサノヲが三貴神なのか、それは国づくりをした神だからではないかということです。つまり記紀はやはり国づくりの謂れを説くところにテーマがあるわけで、歴史を語っているつもりなのです。だとするとこの三貴神は大八洲に三つの国を造った神であるということですね。スサノヲが出雲国を造ったということになっていますが、大和・河内はアマテラスの孫の饒速日神が、筑紫はこれもアマテラスの孫のニニギノミコトが天 降りして国を造ったとされています。
　何故アマテラスは自ら太陽神の国を作るために天降りしなかったのか、それは高天原を支配せよとイザナギに命ぜられたからです。だから高天原にいなければならないので、地上の支配は孫神にということになります。そうするとツクヨミの「夜の食国」とは何で、どこにあったのかが疑問になります。それが書かれてないわけですね。
　もう一つ重大な疑問が西暦600年の遣隋使で倭国では朝廷の儀礼が夜中に行われているということが書かれています。大王は日が開ける前に儀礼を 終えているわけで、もし太陽神が主神や大王家の祖先神だったら考えられない儀礼をしていることが記されています。そこから六世紀までは主神は太陽神ではなく、北極星である天之御中主神だったのではないかという想像ができますね。
　それで高天原をアマテラスは支配していなかったということになり、じゃあ自身が天降って、「日の食国」太陽神の国を建てたという仮説が成り立ちます。それは饒速日神の河内・大和の倭国です。この地域は農業が中心で太陽神信仰が盛んでしたから。それじゃあツクヨミが建てた「夜の食国」はどこか、当然「筑紫」ですね。「ツクし」ですから。恐らく「月地」に由来しているのでしょう。
　そうなると、ツクヨミが筑紫に天降りしたことになるので、ニニギの天降りはなくなり、ニニギは実はツクヨミの孫だということになります。こうして記紀の矛盾点から次々と元の形が想像されるということになります。ニニギがツクヨミの孫なら、父の忍穂耳命もツクヨミの子だったことになりますから、高天原におけるアマテラスとスサノヲの宇気比(誓約)が実は筑紫におけるツクヨミとスサノヲの宇気比だったということになります。
　ニニギの曾孫がイワレヒコで、彼が東遷して饒速日王国を打倒して大和政権を築きます。河内・大和は「日の食国」から「夜の食国」に変えられてしまうのです。 とはいえ、農業が産業の中心なので太陽神の祭祀はイワレヒコに臣従した饒速日が続けることになります。このイワレヒコの東遷はあたかも筑紫倭国全体が東遷したかにされますが、ニニギからイワレヒコの系図をみますと、イワレヒコの一族は筑紫倭国の地方豪族にすぎないことが分かります。つまりニニギの一夜妻であるコノハナサクヤヒメの息子の孫がイワレヒコなのです。彼らは猟師や漁師をして生業をしており、高千穂宮にいて、王子として暮らしていた様子はありません。ということはイワレヒコの大和政権と並立して、筑紫倭国は継続していたのです。
　イワレヒコからオオタラシヒコ(景行天皇)までは筑紫にでかけていませんから、オオタラシヒコが四世紀なので、筑紫倭国は三世紀半ばには存在していたことになりますから、邪馬台国大和説は説話からは否定されます。卑弥呼だとされているモモソヒメやヤマトヒメも大物主神や天照大神の御杖代つまり神の花嫁であり、かつて滅ぼされた王朝の神であり、その祟を防ぐために大王の皇女が嫁いでいるわけで、女王の仕事ではありません。女王なら主神天之御中主神、大王家の祖先神月讀命を祭祀しなければならない筈です。
　三世紀半ばに大和倭国の力が筑紫倭国を上回り、その時代に作られた古墳に魏の年号が三角縁神獣鏡が大和纏向を中心に分布しているとしても、そのことは筑紫倭国が存続し、その中心の邪馬台国に魏の使いが訪れたこと、彼は大和倭国には行かなかったことになりますが、それはいかに不自然だとしても、何か説明する方法を見出さなければならないでしょう。
　四世紀にオオタラシヒコが熊襲勢力に滅ぼされかけている筑紫倭国を救援するために筑紫に遠征しますが、筑紫倭国は既に滅ぼされていて、その仇を討って、筑紫を平定し、その勢いで出雲倭国も臣従させ、三倭国の統合を成し遂げたのです。
　ところがしばらくして熊襲は貢をよこさなくなり、館の改築を強行します。それで小碓皇子に女装させて熊襲の首領を討たせます。ヤマトタケルとなった小碓は帰路に出雲にもより、臣従する気のない出雲建(イズモタケル)を謀略で殺します。そして蝦夷が背いたということで、蝦夷征伐にもでかけます。これは大軍を率いたのではないので、巡察と考えるべきでしょう。蝦夷たちの信頼をかちとって、大和政権に従わせたわけです
　ところがヤマトタケルは伊吹山の雹に打たれて、帰路病に能褒野で斃れます。四世紀後半にオオタラシヒコの息子のワカタラシヒコとヤマトタケルの 息子タラシナカツヒコは志賀高穴穂宮と筑紫の香椎宮に分かれて倭国東朝と倭国西朝に分裂します。朝鮮半島では新羅・百済が興り、高天原である加羅が危うくなったので、高天原・海原倭国・倭国西朝の連合で新羅攻めが企図されますが、タラシナカツヒコは熊襲との戦いに手一杯で応じないので、壱岐対馬の神である住吉三神に呪殺されてしまいます。タラシナカツヒコの王妃オキナガタラシヒメは表筒之男命と密事を交わして新羅攻めに腹の子とともに参加して奇跡的な大勝利を収め、その勢いで倭国東朝も統合してしまいます。
　このあたりまで筆は進んでいるのですが、五世紀、六世紀は統一王朝なので、筑紫や出雲勢力更には壱岐対馬、加羅などがどれだけ大和政権の政策決定に絡むことが出来たのかを記紀などから類推するのは難しいようですね。その辺りは宿題ということにするしかありません。
　六世紀の仏教導入によって、物部氏の太陽神祭 祀権に動揺があり、これが蘇我物部戦争へと突き進みます。物部宗家の滅亡後も大王家は夜の祭祀で、太陽神は物部氏が祭祀する形でしたが、やはり農耕中心なので、太陽神中心にするしかないということで、隋からの教示もあり、喧々諤々の議論の末、思い切って天照大神を主神ならびに大王家の祖先神にすることになったわけです。
　それで主神だった天之御中主神が祟らないように、大王の呼称を同じ意味の天皇にし、主神である天照大神の御子としての権威を持つことにしたわけです。だから天皇号は推古天皇が第一号だということになります。また皇祖神を降ろされた月讀命は伊勢神宮に二つも怨霊封じの宮を作って特別に祀っています。
　それにしても主神や皇祖神を差し替えるという最大の涜神行為ですから、罪の意識も大きく、天が崩れるのではないかという恐怖もあったと思いますが、幸い、仏教を導入していたので、国家の長久を図ることで、人民の暮らしを平穏ならしめるためのすべては慈悲から来ることだとして、御仏の力を借りて強行したわけです。その際に、厩戸皇子が渡来僧の智慧を借りて実力者の蘇我馬子や推古女帝を説得し、朝議をリードしたので、聖徳太子と呼ばれるようになったということです。あるいは蘇我氏がそういう議論をすすめてその責任を皇子に押し付けたのかもしれませんが、説話的には菩薩太子の知恵で神道改革が成ったということにしたわけです。
　要するに聖徳太子と呼ばれるには、それだけ恐ろしい罪を自らに引受なければならなかったということで、その苦悩は想像を絶します。その意味では、人の子なのに神の如き奇跡を行い、自らの肉と血を与えることで、聖霊を引き継がせたイエスの受難に匹敵するかもしれません。
　それで『天皇記』『国記』を倭人三国伝承を元に、それを大胆に改変して書き上げてしまったということですね。一旦、文字にしてしまえば、口誦の方は証拠能力が劣りますから、元々そうだったということになります。これに対して天之御中主神信仰や月讀命信仰勢力や、太陽神祭祀権を限定された物部氏などから激しい抵抗があった筈ですが、仏教及び太子信仰で対決し、謀反の動きとして激しい弾圧を加えたので、蘇我氏の専横がひどくなり、結局乙巳の変につながったのです。**　以上、内容の骨格を示しましたが、哲学者が書くのでどうしてもディテールが抜けて、飛躍だらけに成ってしまいますが、これは日本古代史像を大き く変えることになり、大変な仕事ではないでしょうか?私一人で取り組んでもどこまでやれるか分からないので、共鳴していただける方がおられれば、どんどん プロメテウスに原稿をお寄せください。一つのシューレを形成できるぐらいの仕事ではないかなと自分では自覚しています。
　この仕事がまとまれば、ネオヒューマニズムと哲学との関連にテーマを戻します。と言いますのは、ネオヒューマニズムの人間観は、人間を他の動物との違いで規定する本質規定的な人間観や、パスカルや三木清のように状態性つまり悲惨・偉大・動性、中間者、実存などで規定する人間観に対して、事物の存在のあり方として規定する人間観です。つまり人間社会を構成しているという存在のあり方が人間だということですね。
　この存在論的な人間論は、神観念にも応用が効くのです。ロックに言わせると東洋人には神観念がない、それは神を自然物や人間と区別して、事物一般から超越した存在として信仰していないからです。蛇や石ころまで神だとされているわけですね。しかしこれは神を事物の一種や他者として捉えるのではなくて、事物の存在のあり方として捉えているのですから、ネオヒューマニズム的な人間観と通底しています。
　正月になると鏡餅を正月様に供えると言いますが、元々は正月様自体が穀物神です。穀物神も元々は穀物に神霊が宿る如く捉えられていたのではなくて、穀物自体の存在のあり方なのです。人間に命を与えるという穀物のあり方が神なのです。だから鏡餅こそ正月様の御神体なのです。
　神観念も超越的な神観念だけでなく、神秘体験としての神観念もありますし、こういう事物の存在のあり方が、光・命・愛と関わることで聖性を帯びることを神と呼ぶこともできるわけです。としますと、神を信じているかいないかという問も、その問われている神観念次第で全く異なってくるということですね。
　次々と弾けてくるので、それをどのように表現するのかということで、エッセイや短歌もどんどん書くようになるでしょうし、論文にもまとめたい。 できれば文学作品の中でそういう議論を織り込んでいけるようにと考えています。バーチャル・リアリティというファンタジー形式にはこだわらずに歴史小説や ファンタジーなどの形で表現出来たらという抱負を抱いています。
　倫理学入門などの講義をファンタジーを創作して、それをテキストに行っていますが、それは学力問題が深刻で、いかに興味付けするかということで行っていることです。いわば必要から来ているわけです。しかしその御蔭で、創意工夫をひねり出すことになり、それがまたインスピレーションを呼ぶ刺激にもなっていると思います。人生残された時間も少ないので、後は走り続けるしかないのではというところですかね。
　他にも書きかけていて無責任に放り出している『グローバル憲法草案』も仕上げないといけませんね。また東アジア共同体構想が国家レベルでは進まなくなっているので、民間レベルで進めていく運動も必要かと思います。石塚正英さんは過去の東亜協同体論の掘り起こしを手がけられていますが、そういうのも手がかりにして、過去の反省を踏まえつつ未来志向で東亜協同体づくり推進して行きたいと思います。これは恩師梯明秀・舩山信一の遺志を継ぐことでもあるし、藤田友治さんの熱い思いでもありました。とは言え、私は全く無力でただ文章で訴えたり、授業で語るしか出来ません。しかし一人に語ることが同時に億千万の人に語ることでもあるという言葉の力を信仰して、できるだけ書き続けることにしたいと思っています。